

インターネット利用と自己愛人格

和田 正 人

教育実践研究支援センター*

(2007年9月28日受理)

キーワード：インターネット・パラドックス, 自己愛人格

1. 問題の所在

1.1 インターネット・パラドックス

本研究はインターネット・パラドックスについての研究である。これはKrautoら(1998)が、インターネット利用と精神的健康の関連について研究を行ったことに始まる。コミュニケーションのためにインターネットを多用することが、社会的関与と心理学的豊かさを減少させるというものである。Krautoら(1998)はインターネットをより多く使う10代の子どもは、家族とのコミュニケーションが減少し、孤独感と抑うつ感が増すことを示した。

この研究について様々な批判と追調査が行われた。Shapiro(1999)は、相関関係から因果関係を推測している誤りを指摘し、さらに研究対象の選定で、大学入学者を対象にしたために家族間の接触が減少したこと、地域の学校活動の運営が一段落ついたので親の社会的活動が減少したことをあげた。抑うつを測定した尺度についても批判があり、CES-D(Centre for Epidemiological Studies Depression Scale)は低得点での解釈が困難なことに加えて、結果として示されたインターネット利用時間と抑うつとの関連性が $p<.07$ であり、有意性の $p<.05$ を超えた数値が用いられたことが指摘された(Rierdan, 1999)。抑うつを含むより多くの精神的健康を表す尺度で追試を行なったWastlundら(2001)は、インターネット利用と精神的悩みの間には関連がないことを示している。孤独感の尺度についても、一元的でなく、Weiss(1973)が提唱した社会的孤独感と情緒的孤独感に分けて研究が行なわれ、インターネット利用は社会的孤独感を減少させる

が、情緒的孤独感を増加させることが示された(Moody, 2001)。

一方、インターネット・パラドックスを支持する研究も行なわれた。インターネット利用と抑うつとの関係に、自己効力感という媒介変数を設定した調査(LaRose et al., 2001)では、インターネット利用と抑うつとの直接的関連は示されないが、インターネット利用と自己効力感には正の関連が、自己効力感とインターネット・ストレスとの間には負の関連があること、インターネットとソーシャルサポートには正の関連が、ソーシャルサポートと抑うつと日常の悩みには負の関連があることを示した。これは、インターネットを利用するほどソーシャルサポートを受けられて抑うつと日常の悩みが減少する一方、インターネットを利用してインターネット・ストレスが増えてしまうと、自己効力感が低くなり抑うつが高まっていくというものである。また、Nie & Erbring(2000)のSIQSS(Stanford Institute for the Quantitative Study of Society)研究では2689世帯を調査し、インターネット利用が社会的活動の減少と関連していることとマス・メディアへの接触を減少させることを明らかにした。しかし、これにはマス・メディアへの接触が生活時間として測定されていないこと、メールが増えて電話が減ったことは、電話がメールに代わったのか、メールで電話回線がふさがり電話利用が減ったのかが不明であるとの批判もある(Joinson, 2003)。またPew Internet Projectも2006年の報告ではインターネット利用が社会的な結びつきを強めているという研究結果を明らかにしている。

こうしたなかで、Krautoら(2002)は追跡調査を行い、

* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

インターネット利用は孤独感や抑うつや社会的参加の減少とは関連しておらず、インターネットを新規に利用する者のみ、インターネット利用が社会参加や孤独感や抑うつと関連するとの結論を得た。さらに‘rich get richer hypothesis’ (富める者がますます富む仮説) として、外向的な者はインターネットを積極的に利用することで豊富なソーシャルサポートを得られることを明らかにした。

こうした研究について、Joinson (2003) は、ネットサーフィンや電子メールを対象とした研究は、発展途上の技術を対象とした研究であることを指摘している。

日本においてもパネル調査において、ネット利用は子どもの攻撃性やネガティブ感情を増加させるひとつのリスク要因となるが影響は小さく、社会的スキルが低いとネット利用により攻撃性とネガティブ感情が増加する一方、ネット利用によりソーシャルサポートや自己開示も高まるといった複雑な結果が示されている (安藤ら; 2005, 高比良ら; 2006, 2007)。インターネット利用にも様々な変化が起きた。ネットサーフィンやメールの利用はあるものの、SNSのような社会的なネットワークに入ってネット上の共同体でコミュニケーションを行なうもの、娯楽としてのネットゲーム、3Dの仮想空間のSecondLifeが利用されている。娯楽も音楽のダウンロードから、YouTubeに代表される動画サイトの視聴と投稿へと変化してきた。

1. 2 インターネット利用と自己愛性格

こうした状況において、2007年3月27日に「自己愛は危険なビジネス (self-love is a risky business)」としたニュース (Gwinn, 2007) が、世界中に公表された。このニュースは1982年から2006年までのアメリカの大学生の85のサンプルのNPI (Narcissistic Personality Inventory: 自己愛人格尺度) の評点が20年前より0.33標準偏差上昇したというものであり、2006年の学生の30%が1982年の学生の自己愛人格評点を上回ったという結果 (Twengeら, 2006) である。その原因として、自己愛が個人にとって有益であったこと、個人の目標と期待が自己愛と結びついていること、大学生の教育での成績と成功が自己愛への過剰な信頼を反映していること、パーソナリティと文化が相互に関連しながら進んでいることをあげ、最後にテクノロジーが自分への注目を促進させるとした。iPodやTivoが個人的な視聴形態になり、MySpaceやYouTubeが伝統的なメディアと比べてはるかに自己促進 (self-promote) をしているためであると指摘した。このテクノロジーの変化と自己愛性格の関連は実証されたものではないが、Twengeら (2006) の主張として新聞に大きく取りあげられた。

自己愛は、「自己を価値あるものとして体験しようとする心の働き」 (上地ら, 2004) と定義することで、自己愛を自然な自己愛と不自然 (病的) な自己愛が連続したものとしてとらえている。上地ら (2004) は、自然な自己愛では、自己を価値あるものと体験するために、自分の自己を認めてくれる他者が必要であることを自覚し、多少の不安や恥を感じながら自己の価値を他者に認めてもらうあり方で、不自然な自己愛とは自然な自己愛を抑制または否認し、不自然な自己確認・自己尊重に依存しているあり方としている。さらに、上地ら (2004) は、自然な自己愛の充足が妨げられたことにより人格に生じた歪み、逸脱、脆弱性などの総称として、自己愛の障害という言葉を用いている。

自己愛の障害は人格障害のひとつである自己愛性人格障害 (narcissistic personality disorder) としてとらえられ、誇大性、賞賛されたいという欲求、および共感の欠如の様式であるとされ、成人期早期に始まりるとされている。実際の診断基準は、「尊大で傲慢な行動、または態度」のような9項目のうち、5項目 (またはそれ以上) で示されるとしている (DSM-IV)。

Twengeら (2006) が自己愛の測定に用いたNPIは、こうした自己愛性人格障害が健常人にも認められることから、健常人の自己愛的傾向を測定するものとしてRaskin & Hall (1979) によって作成された尺度で、信頼性や妥当性が証明されたものである。

こうした自己愛は人間関係が大きく関連することから、社会心理学からも問題にされるようになってきた。自己愛が対人葛藤とつながり、犯罪の原因となることについて、1997年の「酒鬼薔薇」事件や大阪池田小学校襲撃事件を大淵 (2003) は指摘した。また、自己愛が抑うつや無気力、不登校とひきこもりなどの心の病理と結びついていること (上地ら, 2004) も指摘されている。

こうした自己愛人格が日本の大学生でも上昇しているのか、それがTwengeら (2006) が指摘したように、インターネットの新しい利用と関連するかを明らかにする必要がある。インターネット利用によって自己愛人格が不自然なまでに高まるのであれば、何らかの対策を立てる必要があるであろうし、そうでなく、適度な自己愛人格を保つのであれば、インターネットの利用を促進させることが考えられよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、問題の所在で指摘されたことから導かれる仮説「インターネットの利用は、自己愛人格と関連する」を検証することである。このために、インター

ネットの新しい利用法と自己愛人格の関連を明らかにしていく。

3. 研究の方法

3.1 調査対象

調査対象は、Twengeら(2006)の研究で対象となった大学生とした。Twengeら(2006)が指摘した、教育的成功としての自己愛の上昇を考えると、大学入試で難関校であるならば自己愛性格が高く、難関校でないならば、それほど自己愛性格は高くないと考えられる。このことから、教員養成大学であるA校と入試難関校B校1校を対象とした。A校学生20名と、B校学生52名を対象として、eラーニングのソフトであるWebClass上に質問項目を置き、2007年5月に調査を実施した。

3.2 調査項目

3.2.1 インターネットの利用法

インターネットの利用媒体として、コンピュータだけでなく、日本の状況にあわせて携帯電話を選んだ。これは、大学生は携帯でも、SNSやBlogを利用しているからである。SNSとBlogはコンピュータと携帯の両方で測定した。YouTubeはコンピュータで見ている大学生が多く、変換して携帯で見る大学生が見当たらないことから、YouTubeへの接触はコンピュータだけとした。また、Twengeら(2006)が引用したMySpaceは、2007年5月当時は日本の大学生があまり使っていないと思われたこと(2007年9月現在でも日本版はβ版である)より除いた。また、Tivoも大学生のネットでの利用が見受けられないことより除いた。さらにiPodsを用いた音楽への接触は、日本では携帯電話の音楽ダウンロードもあることから、今回の研究では用いなかった。従来のコンピュータの利用法が比較のために入れられ、Webの検索とした。

接触については、接触頻度と接触の形態を測定した。接触頻度は「毎日何10回も」「毎日何回も」「毎日少なくとも1回」「週に少なくとも1回」「月に少なくとも1回」「それ以下」までの6点尺度で測定した。接触の形態については、「書き込む」「コメントを書く」「見るだけ」「利用しない」の4点尺度で測定した。

3.2.2 自己愛人格

Raskin & Hall (1979) によって作成されたNPI尺度は、日本語版がいくつか作成され、宮下・上地(1985)、佐方(1986)、大石ら(1987)、小塩(1998)の4つが代表的なものとしてされている。宮下・上地のNPIは、原版の二者択一を7段階評定に変えて35項目の質問から尺度を作成し、

佐方(1986)のNPIは42項目からなる3因子を構成している。大石ら(1987)の尺度は二者択一方式の54項目で構成されている。小塩(1998)は、大石ら(1987)の尺度を再分析し、「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」3因子を抽出し、男女両方に認められる項目とし、項目数を30に減らしたNPI尺度を作成した。この尺度は、自尊感情尺度との関係から、尺度の妥当性が示され、内的整合性から信頼性も確認している小塩(2004)は自己愛傾向の2成分モデルとして「自己愛総合の高低」「注目—主張」の2軸を設定しているため、2成分の質問項目も考えられるが、作成されていない。また、Gabbard(1989)は、傲慢で周囲のことを気にかけない無自覚型(oblivious narcissist)と周囲のことを過剰に気にし、過敏で傷つきやすく内向な過敏型(hypervigilant narcissist)を自己愛人格の下位分類とした。この過敏性が入った尺度も必要であると思われるが、実証的研究の蓄積を必要とする意見(松本, 2004)があることから、本研究では小塩(1998)の質問項目を用いた。これは、「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」の3つの下位尺度で各10項目で5点尺度で測定するものである。

4. 結果

4.1 インターネット利用

インターネットの新しい利用として設定したものなかで、パソコンによるYouTubeの利用は比較的行なわれていた。しかし、パソコンによるSNSやBlogの利用頻度は、大学で差があり、さらに携帯での利用頻度は月に1回も使っていない回答者が60%以上であった(Fig.1)。利用形態においては、YouTubeは見るだけがほとんどであり、SNSとBlogについてはB校では、パソコンで半数近くが書き込んでいるかコメントを書くかしていた。しかし携帯を利用してのSNSとBlogで、コメントを書いたりするは2割以下であった(Fig.2)。

4.2 自己愛人格

自己愛人格尺度の3つの下位尺度において、AグループはBグループより全て平均値が低かった(注目： $F(1,70)=6.51, p<.05$, 優越： $F(1,70)=21.83, p<.01$, 自己： $F(1,70)=32.95, p<.01$)(Table 1)。さらに、Aグループは小塩(1998)が実施した1998年度の調査の520人の大学生の平均値より下位尺度全てが低かった。Bグループは、「注目・賞賛欲求」と「優越感・有能感」の尺度は1998年度の調査と平均値がほぼ同じであるが、「自己主張性」は高かった。インターネット利用と自己愛人格尺度の相関分析の結

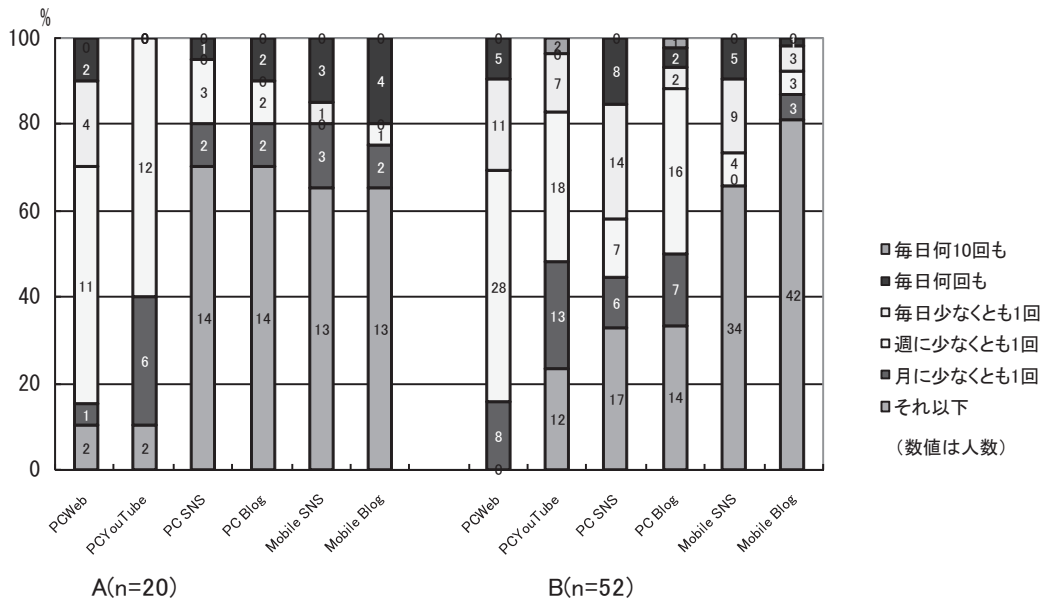


Fig.1 ネット利用頻度

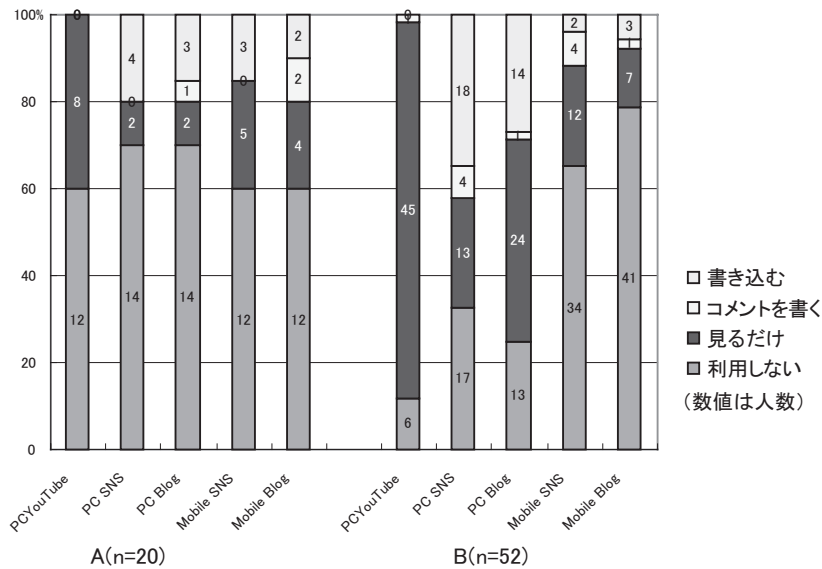


Fig.2 ネット利用形態

Table 1 自己愛人格の3下位尺度の平均値 (標準偏差)

	N	注目欲求	優越感	自己主張性
A	20	24.30a (12.34)	19.90b (9.89)	22.75b (12.37)
B	52	30.27a (7.17)	29.40b (6.75)	34.37b (4.92)
1998年調査	520	31.66 (6.75)	29.91 (6.31)	25.82 (5.80)

aa間の平均値の差p<.05, bb間の平均値の差p<.01

果 (Table 2), 自己愛人格尺度とインターネットの相関があったものは, パソコンでは, YouTubeの利用形態とA校での「注目・賞賛欲求」, B校での利用頻度と「優越感・有能感」「自己主張性」, Blogでの利用頻度とA校で

の「優越感・有能感 (マイナスの相関)」であった。携帯では, Blogの利用頻度と利用形態でのA校での「優越感・有能感」「自己主張性 (マイナスの相関)」であった。Webサイトの閲覧とSNSの相関は有意ではなかった。

5. 考察と今後の課題

インターネット利用と自己愛人格の相関結果 (Table 2) により, パソコンでのYouTube利用での頻度と携帯の相関, パソコンでのBlogの利用頻度での相関, 携帯のBlogでの利用と頻度の相関が示された。これより, 仮説「インターネットの利用は, 自己愛人格と関連する」は一部分が支持された。Twengeら (2006) の主張する, イン

Table 2 インターネット利用頻度と携帯と自己愛人格の相関

大学		PC						携帯				
		Web	YouTube		SNS		Blog		SNS		Blog	
	自己愛		頻度	形態	頻度	形態	頻度	形態	頻度	形態	頻度	形態
A N=20	注目	-.30	.33	.46*	.34	.44	-.23	-.05	.07	.08	-.39	-.39
	優越感	-.38	-.06	.14	.13	.11	-.49*	-.34	-.21	-.17	-.65**	-.64**
	自己主張	-.28	.04	.17	.27	.31	-.41	-.32	-.16	-.18	-.55*	-.60**
B N=52	注目	.18	-.02	-.16	.09	.07	.10	.14	.22	.15	-.08	-.10
	優越感	.13	.28*	.17	-.04	-.14	.17	.00	.09	.07	.02	.04
	自己主張	.21	.33*	.12	.08	.04	.24	.14	.04	-.05	-.06	-.06

** p<.05, * p<.01

ターネットの利用で自己愛人格が上昇するとしたことが、YouTubeの利用に限っては当てはまると想定される。

しかし、A大学でのBlogでの利用は、自己愛人格尺度とマイナスの相関があり、Twengeら(2006)の主張と反対の結果を導いた。A大学で、自己愛人格尺度が低い学生にとっては、Blogを見たりコメントを書いたり、自分で書き込みをすることにより、人と自分を対比させ、さらに人からの批判を受けることで、必要以上に自己を低く考えてしまい、自己愛人格を減少させてしまうと想定される。一方、B大学の学生にとってはBlogの利用と自己愛人格との関連はなかった。これは、自己愛が平均かそれ以上のB大学の学生にとっては、Blogを見たりコメントを書いたり、自分で書き込みをするぐらいでは、これまでの教育競争に勝ち抜いたことで獲得された自己愛人格は影響を受けないということであろう。

また、Webの検索と自己愛人格の尺度の相関が有意でなかったことは、Krautoら(2002)の知見と一致する。

Joinson(2003)の指摘どおり、ネットはまだ発展途上の技術であり、2007年4月の調査状況から半年後でかなり状況も変化してきている。SNSとMySpaceが代表的なものとなってきたことや、日本独自のものとして、女子高校生で流行している携帯サイトで自己紹介をするプロフについて、あるいはまだ日本語ではベータ版しか提供されていないSecondLifeの利用についても調べる必要がある。

A校とB校で自己愛人格尺度の平均に差があったことは次のように解釈される。Twengeら(2006)の調査では、1982年と2006年の24年間にNPI尺度で差が生じていたが、今回の調査では、1998年から2007年の9年間で差であるために、短期間では自己愛人格は増加しないという可能性がある。加えて、Twengeら(2006)の調査で用いたRaskin & Hall(1979)の尺度と、本研究でもちいた小塩(1998)の尺度の相違も考えられよう。さらに、A校とB校の学生の人格の差である。A校では教員養成大学

生の1年生のうち、幼児教育の学生と書道教育の学生が回答者であった。教員養成大学生に求められる資質は、自己愛人格尺度が低いことであり、自己を価値あるものとして前面に押し出すよりも、児童生徒を価値あるものとして認めることが求められる。一方B大学の学生は3年生であり、卒業後は政財界において、いかに自己を価値あるものとして表出するか、つまりエリートとしての行動が求められ、自己愛人格が高いことが賞賛される。こうした求められる役割の違いが、自己愛人格尺度の高低の差となって現れたと考えられる。

また、高すぎる自己愛とインターネットネットの利用の関連についても調べられるべきであるが、高すぎる自己愛人格のために障害を生じた者は、大学生生活を送れないこともあり、今回の研究対象とはならなかった。これは、臨床的研究として考えられるものである。

参考文献

- 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章(2005). インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響, パーソナリティ研究, 14, 69-79.
- Gabbard, G. O. (2002). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Gwinn, E. (2007, March 27). Self-love is a risky business. *The Courier-Mail*. 53.
- Joinson, A. (2003) *Understanding the psychology of Internet behavior: Virtual worlds, real lives*. Palgrave Macmillan. (三浦麻子・畦地真太郎・田中敦訳『インターネットにおける行動と心理』北大路書房 2004)
- 上地雄一郎・宮下一博編著(2004). 『もろい青少年のころ-自己愛の障害-』北大路書房.
- Kraut, K., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Tridas, M., and Scherlis, M. (1998). Internet paradox: A social technology that reduce social involvement and

- psychological well-being. *American Psychologist*, 53(9), 1017-1031.
- Kraut, K., Kiesler, S., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, V. and Crawford, A. (2002). Internet paradox revisited. *Journal of Social Issues*, 58(1), 49-74.
- LaRose, R., Eastin, M. S. and Gregg, J. (2001). Reformulation the Internet paradox: social cognitive explanations of Internet use and depression. *Journal of Online Behavior*, 1(2). www.behavior.net/JOB/v1n2/paradox.html (2007. 9. 23取得)
- 松本智子 (2004). 自己愛を測定する尺度② - 過敏性・脆弱性の尺度 - (上地雄一郎・宮下一博編著(2004). 『もろい青少年のころ - 自己愛の障害 -』北大路書房, 20)
- 宮下一博・上地雄一郎 (1985). 青年における自己愛的傾向に関する実証的研究 (1) 総合保健科学, 51-61.
- Moody, E. (2001). Internet use and its relationship to loneliness. *Cyberpsychology and Behavior*, 4, 393-401.
- Nie, N.H. & Erbring, L. (2000). *Internet and society: A preliminary report*. Stanford, CA: Stanford Institute for the Quantitative Study for Society. www.stanford.edu/group/siqss/Press_Release/Preliminary_Report.pdf (2007. 8. 10取得)
- 大淵憲一 (2003). 『満たされない自己愛 - 現代人の倫理と対人葛藤 -』筑摩書房
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). ナルシシズム的人格の基礎的研究 (1) - ナルシシズム的人格目録の信頼性と妥当性について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 教育心理学研究, 46, 280-290.
- PEW Internet American Life Project (2006.1.25). The Internet improves Americans' capacity to maintain their social networks and get help. http://www.pewinternet.org/press_release.asp?r=121 (2007. 9. 23取得)
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Rierdan, J. (1999). Internet-depression link? *American Psychologist*, 54, 782-3.
- 佐方哲彦 (1986). 自己愛人格の心理測定 - 自己愛人格目録 (NPI) の開発, 和歌山県医科大学進学課程紀要, 16, 63-76.
- Shapiro, J. S. (1999). Loneliness: paradox or artifact. *American Psychologist*, 54, 782-3.
- 高比良美詠子・安藤玲子・坂元章 (2006). 縦断調査による因果関係の推定 - インターネット使用と攻撃性の関係, パーソナリティ研究, 15, 87-102.
- 高比良美詠子 (2007). インターネット使用と子どもの社会的適応, 第14回日本教育メディア学会年次大会発表論文集, 48-51.
- Twenge, J., Konrath, S., Foster, J. D., Campbell, K. W., and Bushman J. B. (2006). Running head: Change in narcissism. www.ksg.harvard.edu/saguaro/pdfs/Twenge_Narcissism_0207.pdf. (2007.9.24取得)
- Wastlund, E., norlander, T. and Archer, T. (2001). Internet blues revised: replication and extension of an Internet paradox study. *Cyber Psychology and Behavior*, 4, 385-391.
- Weiss, R. (1973). *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge: The MIT Press.

Internet Exposure and Narcissistic Personality

Masato WADA

*Center for the Research and Support of Educational Practice**

Abstract

This study found that the Internet exposures related to narcissism. 72 students of 2 universities were analyzed. They completed 30-item forced-choice Narcissistic Personality Inventory (NPI) and 11-item forced frequency of the Internet exposures. Internet exposure items contained Web Search, YouTube, SNS, and Blog through computer and mobile phone. One university's students' mean narcissism scores were significantly above 1998 narcissism scores and other university's students were below these scores. YouTube exposures were significantly plus correlated with narcissism scores. Blog exposures were significantly minus correlated with narcissism scores. The results supported that some kind of Internet exposure increased narcissism and some decreased it

Key words: Internet paradox, narcissism

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)